序＝断片的ウィジョン　（１０）

1

無意識の基盤や、無限を無限自体のしくみにおいて、究明（共振）しうる方法の欠如。
無意識を無意識自体の根拠において、無限を無限自体の根拠において、対象化しうる原理～言葉をもつことなしには、現在の世界情況はのりこえられない。物質～生命～言語～科学～民族～建築～獄～法廷～バリケード～・・・あらゆる領域において。

宗教性とみえるものの本質は、アワ性の共振波動。あらわれとしては、ピンからキリまでの振幅がある。
アワの存在波動量の深さでしか、＜　＞の本質も実現されない。

『動物は　そのオルガーネを通して教えられる。人間は、更にそのオルガーネを教え返すことができる。』（逆序の根拠）
＜情況＞によって鍛えられ教えられる私達は、更に＜情況＞を（に）教え返すこと、その波動量に達することではじめて、＜人間＞でありうる。又、その時初めて大学闘争・・・ともよばれる波動～１９６９以降の情況性をくぐっている（くぐりつつある）、と言いうる。
表現～存在がこの水準たりえているか。

無音にもみえる低・高・周波音域の発生振動～基底波。
教え、教え返し、教え、教え返し、～、～、・・・この宇宙波～振動波。
教えられ、教え返すプロセスによって、向上過程をたどる――＜ヒト＞としての生の意味。
結果としての主張だけでなく、どのようにそれを獲得しえたか、そのヒラメキのプロセスの開示。
時間性との格闘の中にそれをくりこんで展開しない限り、＜・・・＞以下に収束。
脳の働カセカタ。表現～言葉～存在～の根拠の転換。

闘争後、あるいは生誕後、ｎ（十）年へて、いっそう不定さをかかえる存在の魂への　メッセージとして・・・。

大脳二次波動・イと、マノスベの共振波動・ミの違い。――あらゆる領域を横断する正・反重合。フトマニの覚。

幻想領域のα、β、γ、・・・μ～（と、おのおのの往還性）において、いかに、どれ程、変化し普遍的テーマを提出しえているか。

幻想領域のα、β、γ、・・・μ～性に出あっていても、充分生きえない存在、出会う条件を持ちえない存在が、このテーマをも深めうる条件は、どのように提出されうるか。

未来宇宙を貫く最深部のイマイマにおいて問われること。

人類（史）にかかわる根源的な転換あるいは発生ゆえ。

全情況との関連におけるα、β、γ、・・・μ～全幻想領域性と、アワ～無限　の促迫。

「１９６０～７０年代あるいは８０～９０年代の、気付かずにきた急流」、「歴史というのは＜ない＞のではないか」、「勤務先の学校へ、少年期のように、フト、行きたくない」（吉本－江藤対談）、等の感覚の訪れは、その本質の意味するところは、'６９情況～大学闘争・・・という形をも通して現れている、潜象無限のアワ～アマの促（息）迫。

人類（史）は、波動レベル～振動波の変位～波動量の高低～変遷としてとらえることなしには、＜文化＞も、事実経過を連ねているようにみえる＜歴史＞も、その本質は解明～開示されず、＜人間＞の本質も　発生～究明しえない根拠、逆巻く潜象のウヅ、に気付こうとしていることにもよる。

現象を包囲しているアマーカムの、アワ性の、無限潜象域。

無限を無限において扱う（アツカエル）方法を持たない体制～文明は、必ず自らの・・・によって崩壊する。

・・・をつくりだしているモノ、又、カゲで支えている視えない潜象のモノ、～・・・の根拠をカムーアマに（から）開（解）放する根拠と方法の提示。――この過程を経てはじめて全～関係が、生き始めうる。

物質の本質を＜カムカヘル＞マノスベの応用へと、発想を転換しない限り、その場しのぎのあえぎにしかならない。

「我」とは＜クマリ＞であり、「無我」の本質とは、そのクマリのクギリを通して、無限界に自由に出入りするスガタ。無我の境地（サトリ）に至る方法（ミチ）は、カムカヘルこと。カムにカヘ（帰）り、カムからカエ（発生）る。

＜カム＞へ（から）カヘルであると同時に、クマリのクギリを通して（として）、発生するイミ。そしてそれを支えるアワカゲ、モロカゲ。この根源的な往還性を方法化しえない法権力は、氏名（人定）を黙秘～黙示する存在に対し、判決、決定、刑の執行は行うが、逮捕や拘束時に法権力が自ら付

けた存在特定名＝逮捕番号・拘束番号を媒介に、被拘束者本人から異議や抗告の申し立てがなされた場合、氏名の記載がないという理由をもって、それらの申し立てを一切認めない。（最高裁判例）（昭和６１・５・１３東京拘置所女区・拘束１号等――再審請求中。）ここには、非公開（傍聴者の排除）で弁護人や証人なしで、事件の一方の当事者である裁判所が自ら拘束した存在に対し自ら刑を言い渡す制裁裁判や、裁判所の構成上の形式さえととのえていればどんな裁判官も忌避の対象にならないとする最高裁判例、死刑、再審、に重層・対応する闇の本質がはらまれている。

ナにもない空間～マにおいてこそ、ヒト～モノ～は成長し、考え、深められる、ということの根拠。本質的にマ（無限への回路）を持た（て）ない諸領域の氾濫。

圧迫感として感じてしまう人々に、そうではなく、＜カムカヘル＞方向を示しうることが必要。――サトリは誰にでも恵まれるもの。

4

最初から無限的～無限を食べて発しうる存在。

現象のワクをクヒ（食い）破って、無限を呼吸～食しうる存在。（プロセスを必要とする存在）

大学闘争・・・を生み出した情況の本質――無限への（からの）回路を無限に応用しうるかどうか、の問いの促迫～息づかい。

いわゆる大学とは関係ないといってよい程に＜大学＞をもつらぬいて、もっとふかい何か。

発想回路の無限性にたえきれず、（ささえる根拠（物理）とアマウツシ法を見いだせず）、自らそれに＜ワク＞をしていった菅谷規矩雄。

未来からのゲバルト――表現としての大衆団交情況。それ自身の内部にアワの少数者鍛練の根拠（物理）と方法を持つ場合にのみ、向上的深化の過程をたどりうる。ここには人類史的な未達成域～転換の根拠がかかっている。

すべて発生（の根拠）に遡って転換する。全概念・物質・生命・ジャンル・言語・記号・動、植、鉱物・宇宙的微粒子～波動・潜象無限域・・・あらゆるモノ・コト・・・のヒビキ～意見をキキツツ、表現しうるか。

１９９１・６・２０討論記録をめぐるパンフ「――不確定な断面からの出立――」について。

企画者の螺旋状の表現過程の息づかい――何重ものふくらみが渦状に形成されていて、重なりを持つ幻想の花びらの発生のよう。

一方、発語の呼吸・発生過程のマ～潜象過渡・瞬間そして関係時（いつ、発語されたか）、には、その発語の深度・振動波動量が示されている。従って、発語の空間性～内容（テーマの空間的な輪郭）が、いつ発語されたかより、鮮明に記憶されることの特質は、発語者のしゅんじゅん～内的過程～凡

人アワ（天与の才を発揮するのにプロセスを必要とする人々）としての苦しみ・その必然・どう生きていいか分からないという内奥のひびき・・・、それらに、正・反振動を加え、固有振動を高調させ、微波動鍛練により波動量を鍛え、転換的に、マノスベの深化のミチをたどる方向軸、照らすもの、原理と方法の提起の内的過程が、記憶による記録者をふくむ〜にとって未だ充分意識化されていない可能性にも対応すると思われる。複数の存在、しかも、複数の性による、対等の波動量によるフトマニの共闘の実現が不可欠である所以。

1・＜コトバ＞を空間的、関係的に理解する特質。2・あるいは、時間的経緯〜順序〜瞬間（トキ）のマ〜アワの促迫に即して把握しうる特質。3・あるいは、振動波レベルの変遷、潜象過渡、として、ヒビキ、対向発生する方法。4・〜

これらを自在に応用〜逆序しうる根拠が、求められている。

*1・空間的移動に、カムミの対向発生、*2・時間的進行〜変化に、カムミの対向発生、

が、各々、伴わない場合、そのこと自体の、アワからの根拠の解明と転換（原理と方法のシメシ）がなければ、*1・*2をなしうるコト〜モノ〜存在もフトマニ　ニ　なりえない。

5

同時代建築研究会のメンバーによる『ワードマップ　現代建築』の企画に対し、松下昇によって、作業の方向性が提起され、それは＜あとがき＞原案としても表現されている（前記パンフ参照）。

これにたいし、反発をかんじる人、批判の切り口が鋭すぎると脅える人、現在の力量では実現不可能と判断停止する人、沈黙する人、方向は感じとっていても、結論（方向性）がミチビカレルニイタルその根拠・方法・プロセス・「眠れる脳」の覚まし方のステップ（到達点に共振する振動波の高め方、その方法論）がないと歩み出せない人、深い共振を示す人、等々があり得ると思われる。

＜あとがき＞原案において述べられている＜遅れ＞や＜停滞＞は、別の言い方をすれば、生活や職業や専門分野や・・・をふくむ情況の重力を、転倒的に生き表現する原理や方法に包囲されて在る現情況の本質（'69年以降の原則）への＜無意識＞が、深い＜覚醒＞を求めている、ということ。最も速く作業した人の根拠、〜最も遅れる人の根拠を総体として包括しつつ。各人が最もあいまいに放置している、あるいは触れたくない領域〜テーマとの関連において。

それを通過・内部に存在・ヨムことで、存在交換〜変換しうる＜建築＞あるいはその＜ワードマップ＞は、可能か？が問われている。

大学闘争・・・に関する批評〜資料・集　――不可視の通巻第6号――の、不可避の構成要素＝特集号として、甲山（学園）闘争〜甲山事件・マスコミ篇　を刊行する。（〜1990年5月〜　序＝断片的ヴィジョン（5）参照。）

1986・3・24公判←→　1974・3・17〜19甲山←→＜　＞焼き〜1974・4・1卵裁判←→1974・7・31←→〜←→のネジレが開示するもの。
被告＜　＞を拘束させている真の主体〜チカラはナニか？
そして、無意識に、あるチカラにひきよせられ、＜演技＞させられている、総ての関係者。

仮装。そして逆仮装。
契機を越えて、＜被告＞存在としての情況性をすべてにないきる、内的変換のプロセスを、発端における生命〜死の速度をいかに越えて、開示しうるか。

闇を、ヨリフカイヤミ自体の根拠において対象化する根拠と方法。
権力の介入、裁判、マスコミ、・・・等の諸関係が＜ない＞場合に、なお問われる問題〜ツミの本質は何か。

これらの記事は、審問宇宙からの、どのような断面、本質、偏差であるか。

その総体を、アマが関与する死者の根拠、生存の闇、全幻想領域、アワの潜象物理、〜未宇のまなざし・・・から対象化し、あなたをふくむわたしたちの、そしてそれを越える〜の、真の＜ツミ＞とは何か？を究明していく。
その審問を、――闇に閉ざされているイノチ、モノ、69年以降や、自己史に関わって決定的な作用を及ぼしているとみえる事実や・・・を、すべて生き直す、生きカヘス（カエル）、不可能性からの転換の深さを、――自らになう、個々の存在〜場に、この批評〜資料・集の企画（マスコミ篇・表現篇・大学、国家、・・・篇・〜篇）は、開かれていく。

〜1991年10月〜

仮装被告（団）

序＝断片的ヴィジョン（５）

一瞬の呼吸停止
を　永続的に黙示する＜　＞
として、
通巻第６号を　不可視化しつつ、第７号　へと　　跳躍する。

ゲーテ絶筆の三月書簡（１８３２年３月１７日）の根拠～波動量が、アマ～カム互換重合、正反四相、対向発生をふくむ潜象物理とともに人類（史）的に対象化され体現され得ている場合、＜甲山＞事件（１９７４・３・１７～３・１９）は現象せず、たとえ現象し得る場合にも、発生要因の潜象過渡からの解明は　発生・前に実現されている、と言い得る根拠を実践しつつ――――。（倫理としてではない。物理として。）

＜光子＞・＜悟＞――――その存在性・名（ナ）～音声思念・こそは、現代科学にとどまらない現人類の全～域の限界極を指し示し、それは法的審理においてすら影を落とし、＜被告存在＞に対する、逮捕、不起訴、再逮捕、起訴、無罪、破棄差し戻し、と、激しい揺れを生み出している。

また、＜１９７４年３月＞という情況下に、六甲山系の東端甲山で発生しているイミ。

＜ファウスト＞を＜封印＞して死んだゲーテの根拠（＜ファウスト＞の真実は、人類史的に未だ未開封。）に（も）共振し得る波動量を自ら鍛え抜く方向軸。

ナントシテモ　ソノ呼吸ヲ　浄化槽ノ汚泥カラ　ヨミガエラセナケレバナラナイ　――――その不可能性の重力を、生命をかけて対象化～転倒し抜く度合いでしか、＜事件＞も、本質的な＜支援＞も、成り立たない――――。

大学闘争・・・に関する批評～資料・集　は、通巻第６号を黙示する不可避の構成要素＝特集号として、甲山（学園）闘争～甲山事件・マスコミ篇　を刊行していきます。

～１９９０年５月～

仮装被告（団）